# 山科言継筆『堀河院艶書合』の性格と書承

## ——青山学院大学本から佐賀大学小城鍋島文庫本へ——

相原宏美

### はじめに

平成十七年五月、青山学院大学で開催された中世文学会春季大会（五〇周年記念大会）の折、同大学蔵『堀河院艶書合』（以下、『艶書合』と略称する）が貴重書展観に供された。該本は室町後期、山科言継の書写にかかるもの[1]である。まずは会場で配布された「展示書目解題（青山学院大学）」により書誌を掲げる。

『堀河院艶書合』（日文研究室）093/H7

写。袋綴一冊。縦二五・八cm×横二一・〇cm。一面一四行。天文二年（一五三三）写。山科言継筆。外題を青蓮院尊朝親王筆とする極札あり。

該本はこれまで、『艶書合』の伝本の面からも、言継の書写事蹟としても取り上げられることがなかったが、現存する言継筆の写本の中ではもっとも早い時期の書写であり、しかも、記録によりその足跡をたどることのできる貴重なものである。本稿では、青山学院大学本と、その転写本である佐賀大学小城鍋島文庫蔵二本の計三本に着目し、言継が『艶書合』を書写するに至った経緯と、言継筆本『艶書合』の性格、佐賀大学小城鍋島文庫本に至る書承の実態について見ていくこととする。

### 一　青山学院大学本書誌（追加）と書写経緯

後日、閲覧をお許しいただいた際の調査によれば、表紙は植物の繊維を多く漉き込んだ黄土色の斐楮交漉紙、表紙中央に『堀河院艶書合』一五・五cm×三・〇cmの題箋（文様あり）が貼付されている。本文料紙も斐楮交漉紙（紙背なし）。

また、前掲「展示書目解題」でも触れられていたように、裏見返しには、以下のような無署名・無印の極札（一五・九cm×五・一cm）が貼付されている。

艶書合一冊奥三年号名号
山科殿言継卿正筆
外題ハ青蓮院尊朝親王

「奥三年号名号」とあるごとく、10丁表に、

此一冊、依左武衛厳命不顧焉馬之訛叨留春蚓秋蛬之跡耳。堅可愧他見云々。
　　皆天文癸巳黄鐘上旬　　倉部羽林藤言継

との自筆奥書がある。これは『言継卿記』[2]（以下「日記」と略称する）天文二年十一月八日条に、

青門へそと参、堀川院艶書合外題申請候、高倉左兵所望之間、書写候て遣候本也。

とあるのと符合する。『艶書合』奥書で「武衛」、日記で「高倉左兵」とされているのは高倉永家（明応五 1496 ―天正六 1578）であり、青山学院大学本『艶書合』は、彼の要請を受けて書写し、贈られたものであったことが知られる。

天文二年、永家は三十八歳。この年二十七歳の言継に対し、十一歳年長であるが、従前より二人の親交は厚く、日記にも多くの記事が見える。こうした両者の関係には、山科家と高倉家との姻戚関係が大きく関係していよう。

右の系図のように、言継の祖父言国は高倉永継の女を娶っており、その間に生まれたのが言綱である。つまり、言継の祖母は高倉家の出であり、父言綱と永家は従兄弟にあたる。

天文初期、永家は近江に在国しており、必要に応じて上洛するという生活を送っていた。高倉家は代々武家に近侍し、執奏を勤めたり、衣紋を奉仕したりしてきたから、これも将軍義晴の近江滞在に伴うものであったと推測される。大永七（1527）年二月の細川氏内訌に際しては、

高倉ものきかねあふなく候つれ共、やう〳〵のき候、粟津右京進もゝをいぬかれ候、山口彌九郎も手をい候由申候、（大永七年二月十三日条）

とあるように、被官の衆共々、義晴・高国勢の一員として実戦に参加している。柳本賢治の丹波勢に敗れてからは、

武家、細川、武田、其外奉公奉行衆不殘候、公家飛鳥井高倉兩人也（同年二月十四日条）

敗走する義晴・高国に同行し、近江に下ったのである。言継はこの戦い前後から、永家の禁裏小番代理を継続して務めているほか、戦いの激化を前に、

朝飯以後、白川、高倉兩所へ罷下候、物忩候也、女房者高倉所より可來之由候、（大永七年二月六日条）

高倉左兵所へ罷候、夕方此方へ皆々可來候、…七時分高倉女房衆此方事、をもてのさしきにをき候、（同年二月十二日条）

夜高倉息、法印、予竹壽等、四時分まて碁をうち候了、（同年二月十八日条）

とあるように、高倉家の女房たちを、一時自邸に引き取って避難させ、永家らの下向後には、京に残された高倉息（この歳十歳、のちの永相）の面倒を見るなどして、公私にわたり、強い協力態勢を敷

いていたことが分かる。

こうした関係は天文二年の時点でも続いている。二年の冬から三年の春までを見ると、永家は、十一月に一度と、十二月十五日から翌年閏一月にかけ[3]ての計二度、京に逗留した。二年十一月は、十五日から十八日までの短期滞在であったが、これは十二月九日に行われる若宮（方仁親王、後の正親町天皇）の親王宣下に向けて、装束準備のための上洛であったと思しい。日記には、

武衛、若宮御方御寸法祗候、予同道候了、御冠之頭寸法、御足御寸法等給了、次御盃一盞武衛被下候、次還御、（天文二年十一月十六日条）

とあり、言継も立ち会って、永家が若宮の装束の寸法を計ったことなどが記されている。この時も、上洛の予定を長橋局に伝えたり[4]、彼の到着を受けて饗応を行ったり[5]と、言継は毎日かいがいしく世話をしている。言継から永家へ『艶書合』が贈られたのは、こうした時期であった。

永家は和歌や連歌に深い関心を寄せており、自らも度々歌会や連歌興行を主催している[7]。こうした永家にとって、『艶書合』は、和歌の趣向という面からも、興味深いものであったに違いない。日記を遡ると、

四時分に下河原殿へ参候、予堀河院艶書合持参仕候、一校仕了、（大永七年六月十九日条）

との記事があり、言継が早くから『艶書合』を所持していたこと、言継所持本には、下河原殿[6]の本によって校合が加えられていたことが分かる。青山学院大学本は校合跡を残していないため、この時の本が実際にその底本となったかどうかは定かでないものの、永家はこうした言継所持本の存在を知った上で、書写を依頼したのではと推測される。依頼の時期は不明であるが、同年九月に言継は、夢想法楽連歌参加のため永家邸を訪問しており[8]、この時もしくはこれ以降に依頼を受けて準備を進めていたものと思われる。

書写依頼に応え、言継は丁寧に書写を行った。料紙も、反古紙ではなく新たなものを用い、無造作な墨滅や重ね書きによる訂正を行わず、書き誤った箇所を慎重に擦り消して改めている点からも、依頼主への心遣いが感じられる。

奥書で彼は、字のまずさや、誤写の恐れを述べ、「堅可愧他見」と断っている。いずれも謙遜の辞として理解すべき文脈であるが、「依左武衛厳命」としている点には一応注意が必要であろう。日記に因れば「所望」であったものを、仰々しく「厳命」と言い換えた裏には、言継から永家へ向けられた一種「戯れ」のさまを読み取ることが出来るのではなかろうか。

言継は前掲の日記十一月八日の条で、「青門」に外題執筆を乞うたとしているが、極札が外題筆者と認定している尊朝親王（天文二―1552―慶長二―1597）は生存年が合わず、首肯しがたい。天文二年の時点で「青門」と称されていた青蓮院門跡尊鎮親王とすべきであろう。言継は同年九月にも永家息の永相のため、尊鎮親王に「三社託

宣」の染筆を依頼している。

青門へ参候、藤侍従料三社託宣天神名號申請候了、（天文二年九月十九日条）

『艶書合』の外題申請も、あるいは永家の意向を酌んだものであったのかもしれない。

さて、10丁裏の識語は、この本がその後に辿った数奇な運命を伝えている。

明和七年九月初七、書林携来非棄置贖之了。考天文癸巳則二年也。于時左兵衛督高倉永家卿也。桑門徹紹

ここで奥書に校勘を加えている「桑門徹紹」は、山科頼言（享保七 1722—明和七 1770）の法名。言継から数えて七代目の山科家当主である。明和七年、ある書林によって頼言の許に持ち込まれ、買い取ったものであり、この時から山科家に蔵されたことが知られる。本文のはじまる1丁裏の冒頭には、それを裏付けるように「山科蔵書」印が見える。この本は、言継が書写してから二四〇年近くを経た後、山科家へと戻ってきたのである。

頼言はこの時四十九歳。同七年の十二月二十二日には没しているから、そのわずか三ヶ月前、最晩年に言継筆本『艶書合』を手にしたことになる。頼言は『公卿補任』をもって『弁官補任』の散佚部補入を行ったほか、『検非違使補任』『検非違使別当補任』『后位年譜』『神祇伯補任』など補任類の著作を持つ。かつて『公卿補任』整備に腐心した言継の存在は、ただ山科家祖先のひとりとしてだけでなく、さらに身近なものとして、頼言の目に映ったものと思われる。

## 二　青山学院大学本の性格

言継筆の『艶書合』は、どのような性格を持つものなのであろうか。奥書や日記などから、底本につながる情報は得られないため、本文の特色を拾い出し、伝本内での位置づけを試みることとした。

まずはじめに『堀河院艶書合』の伝本を概観しておきたい。かつて萩谷朴氏は、『平安朝歌合大成 五』[9]（以下、『歌合大成』と略称する）に、二四四「康和四年閏五月二日・同七日　内裏艶書歌合」の名称で取り上げられ、

堀河院艶書歌合の伝本は頗る多い。架蔵長享元年書写二年奥書宗覚本・同楓洞延年書写堀部弥兵衛奥書本・山口家蔵柳原業光書写巻子本・宮内庁書陵部蔵桂宮本（霊元天皇宸筆外題）・同松岡文庫本・同鷹司本・彰考館本・高山市役所蔵香木園本・島原公民館蔵松平文庫二本・小城鍋島文庫本・大島家蔵本・東京大学図書館蔵本等の写本を始め、万治二年九月刊本・寛文元年六月谷口三余刊本・同田中文内刊本・無刊記本・元禄十一年刊本・群書類従本等の版本がある。

として写本十二本と版本の存在に触れられた。萩谷氏はご架蔵の長享元年書写二年奥書宗覚本[10]を底本として、他の八本（楓洞延年書写堀部弥兵衛奥書本・彰考館本・高山市役所蔵香木園本・群書類従本元禄十一年刊本・松岡文庫本・桂宮本・同鷹司本）との校異を示さ

れたが、それ以降、同歌合の伝本研究は、系統立てに至ることなく、目覚ましい進展を見ない状況がつづいてきた。

まずは『歌合大成』の底本となった鶴見大学蔵宗覚本から、序と冒頭三首を掲げる。[1]

【宗覚本】

内にて殿上（の）人々哥よむと聞ゆるに宮づかへびとのもとにけさうの哥よみてやれとおほせことにて　大納言公實

1　おもひあまりいかてもらさむおく山の　岩かきこむる谷の下水　周防内侍

2　いかなれはをとにのみきく山河の　あさきにしもは心よすらん　おなし大納言紅のうすやうにてだてふみて

3　としふれといはて朽ぬる埋木の　したの心はふりぬ恋かな

次に、青山学院大学本の冒頭部を挙げ、比較してみる。

【青山学院大学本】

うちにて殿上の人々哥よむときこゆるみやづかへの人のもとにけさうの哥よみてやれとおほせ事にて　大納言公實

1　おもひあまりいかてもらさむおく山の　岩かきこむる谷のした水　周防内侍

2　いかなれは音にのみきく山川の　あさきにしもはこゝろよすらん　おなし大納言くれなゐのうすやうにたて文にて

3　年ふともいはて朽ぬるむもれ木の　したの心はふりぬ恋かな

異同のある箇所に傍線を付した。両本の波線部・破線部・二重傍線部がそれぞれ対応している。いずれも、解釈上甚だしい差違を生ぜしめるものではないが、波線部、宗覚本で「哥よむと聞ゆるに」は「殿上（の）人々」の述語であり、「宮つかへ人」とは切り離されているのに対し、青山学院大学本では「哥よむときこゆる」は下の「みやつかへの人」にかかる修飾語となっている。また破線部は、宗覚本には「たてふみて」とあって、動詞「たてぶむ」の連体形とするのに対し、青山学院大学本では名詞「たて文」＋「にて」となっている。二重傍線部は「ふれと」か「ふとも」かで異なる。『歌合大成』「本文校異」にて同様の本文を持つ本を検索すると、左記のようであった。上段に宗覚本、下段に諸本を略号で掲げ、青山学院大学本と同形のものを文字囲みで示した。

序　聞ゆるに—きこゆる鷹

宮つかへ人—宮つかへの人楓彰香鷹

3　うすやうにて—うすやうに柳彰版鷹—うすやう楓

たてふみて—たてふみに彰香群版松—たてふみにて楓鷹

ふれと—ふとも香群版松桂鷹

萩谷氏が校合なさった八本の中では「宮内庁書陵部鷹司本」…略号鷹との共通異文が多いことが分かる。[2]

萩谷氏調査の八本を含め、現存する『艶書合』の写本について、[3]可能な限り同様の調査を行ったところ、「青山学院大学本」や「鷹司本」と共通する独自異文を持つ本には次の二本があることが判明した。「高岡市立中央図書館本」[4]…略号高と「島根大学桑原文庫本」[5]…略号桑である。以下、「青山学院大学本」「鷹司本」に共通する独自

異文箇所について、「高」「桑」二本も含めて校異を示す。

7　しつく—涙鷹青桑
9　たちける—たちぬる鷹青
10　恋ちをは—恋路には鷹青桑
12　たゆとて—たゆ共鷹青高桑
14　こころそは—心そよ鷹青—こゝろはへ桑
16　なかれても—なかれては鷹青
20　たゝし—立し柳高—たてし楓彰香群—たちし鷹青桑
23　いさやいかゝは—今はいかてか鷹青高桑
24　詞書ナシ—返し鷹青高桑
27　着馴れてし—きてなれし鷹青高桑
28　なにゝ心の—なにの心も鷹青—何の心に高—なにゝこゝろも桑
29　人知れぬ—人しれす鷹青桑
33　ま葛原—まくす葉は鷹青桑
（部外序）めてたかりけりとそ—めてたかりけりとて楓—めてたかりけるとそ香松—めてたちけるとそ鷹青高—みてたちけるとそ桑
48　いまはわか身そうらめしく—ナシ楓—いまはわか身そうらめしくて…鷹青—今は我身もうらめしく…高—いまはわかみもうらめしくて…桑

「青山学院大学本」と「鷹司本」の本文が極めて近い関係にあるのに対し、「高岡図書館本」「桑原文庫本」は、わずかながらも、個々に独自異文を有していることから、多少異質に映るかもしれない。ところが、作者表記に限ってみれば、

13　刑部卿俊実—刑部卿頼実青高桑
19　四条中将師時—四位権少将師時青高桑
30　権中納言俊忠—俊忠中将青高桑

本文の近似する「鷹司本」とは一致せず、「高岡図書館本」「桑原文庫本」の両者と一致する。つまり、これらの四本は非常に近い関係にありながらも、各々の間に書承の関係は認めがたく、同系統に属するという程度にとどまるのである。

## 三　佐賀大学小城鍋島文庫本へ

言継筆の『艶書合』はその後、多くの人々に享受されたと見られる。佐賀大学小城鍋島文庫には請求番号［0956/9］［0956/10］と二冊の『艶書合』が収められているが、両本はともに言継本の奥書を有する。[16] 以下、請求番号の順に、私にA本・B本と称することとし、書誌と奥書を掲げる。

①佐賀大学小城鍋島文庫A本　［0956/9］

写。袋綴一冊。縦二六・五cm×横一八・八cm、大本。墨付10丁。一面一三行。本文料紙は楮紙。紺色表紙。新装帙入り。「荻府／學校」（2オ）「勝」（10ウ）の二印あり。

（奥書）此一冊依左武衛厳命不顧烏馬之訛叨留春蚓秋蛬之跡耳堅可

愧他見云々

皆天文关巳黄鐘上旬　倉部羽林藤原言継

右一冊者阿野中納言實顕卿以御本寫

書写

元味(マヽ)七年九月尽　　玄仲　」

②佐賀大学小城鍋島文庫B本　[0956/10]

写。袋綴一冊。縦二〇・七cm×横一四・二cm、中本。墨付10丁、遊紙1丁。一面一二～一四行。本文料紙は楮紙。表紙は白地に黒の菱繋文様。新装帙入り。「曲肘亭」「叢桂／館蔵」（1オ）の二印あり。6オ途中～8ウは別筆か。

（奥書）　此一冊依左武衛厳命不顧烏馬之訛叨留春

蚓秋蕚之跡耳堅可愧他見云々

皆天文巳黄鐘上旬　　倉部羽林藤原言継

右一冊者阿野中納言　　以御本写書

写

元　七年九尽　　玄仲　」

印記から、A本は小城藩二代藩主直能、B本は七代藩主直愈の兄で家督をつがなかった直嵩の蔵書であったと見られる。[17]

島津忠夫氏によれば、「直能公年譜」（享和三年成）の寛永十六年の条に、

直宗公（直能の前名、島津氏注）は兼て和歌の道御心懸飛鳥井大納言雅章殿へ御入門歌道の秘事詠方の口決連々御相伝被成候蹴鞠の道も同しく御執心に付御免許之御状有之候

とある由であり、

（雅章と直能は）単なる師弟関係をこえて、非常に親密な間柄であった。（中略）雅章を通じて多くの和歌の書物をかり出しては、近臣の能書のものに写され(マヽ)ているのであるが、直能の蒐書と推定される、「勝」かと思われる方印のあるものには、これらの写本が多い。

としておられる。Aなどは、そうした蒐集書写活動の一環として小城藩に伝えられた可能性が高いと思われる。

改めてA・B両本を見ると、言継の奥書の後ろに玄仲の奥書を持ち、言継→阿野実顕→玄仲→直能周辺と、たびたび転写が繰り返されてきたことが分かる。

阿野実顕（天正九 1581 —正保二 1645）は「若い時から細川幽斎・中院通勝・烏丸光広に愛せられ、古典・和歌を学」んだといい、『耳底記』には光広とともに吉田の幽斎を訪ね、講釈を受けるさまが描かれている。[19] 宮内庁書陵部蔵『古今文字読聞書』[F4/13] は内題を『寛永十年八月廿八日／始阿野中納言實顕／古今文字讀の聞書』といい、実顕自身、古今講釈を行う立場であったことが分かる。[20]

実顕本を書写した玄仲（天正六 1578 ～寛永一五 1638）は里村紹巴の次男。きわめて多くの連歌に出座し、長年にわたり活躍をつづけた。

このように、言継筆『艶書合』の転写が、実顕や玄仲の手を経て

行われてきたことは注目に値しよう。実顕も玄仲も非常に恵まれた文学環境におり、幽斎・通勝・光広・紹巴らを通じて、善本を入手できる立場にあった。そうした中においても言継筆本が珍重され、重視される存在であったからこそ、転写に至ったものと考えられるからである。

## おわりに

以上、青山学院大学蔵の山科言継筆『堀河院艶書合』について、成立の背景と性格、後代への影響という面から検討してきた。言継筆本は、永家との親しい交流の中で成立し、「鷹司本」「高岡図書館本」「桑原文庫本」などに近い内容を持つ。公家たちの間で広く享受されたのみならず、後には藩主層にまで書承され、珍重されたのである。

言継筆『堀河院艶書合』は、公家の書写本として武家の間にも浸透し、大きな存在感をもって受け止められてきた。こうした書写と伝来のありかたは、言継の書写活動について考察を進めるうえで、非常に示唆的である。また、『堀河院艶書合』の伝本を考えていくうえにおいても、言継筆本は、今後決して無視できない貴重な一本であるといえよう。

〔注〕

(1) 後述のごとく奥書・極札によるが、筆跡のうえでも、

・「言継」と署名する際、「継」の最終画を大きくはね上げる。

・「の」文字の左半分（丸く囲まれた部分）が不均衡なまでに大きくなる場合が多く、最後の払いも左上へ勢いよく上がる。

・「は」文字第二画の横棒が、極端に右下がりになることがある。

などの書き癖も他の言継自筆本（家集『拾翠愚草抄』など）と共通している。よって言継の自筆と認め、これを扱う。

(2) 高橋隆三氏・斎木一馬氏・小坂茂吉氏校訂『新訂増補言継卿記』（続群書類従完成会　昭41～）、以下同様。

(3) 十一月の永家の逗留中、言継は彼の参議昇進と自らの加級を帝に要請している（十一月十六日条）。この時は両者とも叶わなかったが、永家は十二月十九日付で参議へ、言継は翌三年正月六日付で正四位下へと昇ることが出来た。十二月から翌年にかけての長期滞在は、昇進に関係するものであろう。

(4) 「従途中人來、高倉可罷上之由書状有之、則長橋へ申入候、」（天文二年十一月十一日条）

(5) 「八時分高倉左兵衛督上洛、樽代三十疋到、則入麺にて一盞勧候了、彼官衆餅にて一盞勧候了、晩飯各此方にて用意候了、松井新左衛門、粟津三河守、吉田五郎、山井將監、山口彌九郎、粟津孫二郎等也、」（天文二年十一月十五日条）

(6) 永家の和歌事蹟については井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町後期』（明治書院　改訂新版　平3）に詳しい。『言継卿記』にも多くの記事が見えている。

(7) 下河原殿については、井上宗雄氏が「仁和寺上乗院」、「邦高親王弟道永親王或は邦高子道喜か」と比定しておられる。(前掲『中世歌壇史の研究 室町後期』)

(8) 「従途中山口彌九郎上洛、明日夢想之法樂連歌之間、今日可罷下之由云々、仍用意候了、」(天文二年九月十九日条)、「今日連歌藤侍従母夢想也、いかにしてたえぬ三代世や常磐山、人數左兵衛督、下官、藤侍従、臥雲庵[illegible](以下略)」(同九月廿日条)

(9) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成 五』(同朋舎出版 増補新訂 平8)

(10) 萩谷氏旧蔵の「長享元年書写二年奥書宗覚本」は現在、鶴見大学図書館所蔵。この本については石澤一志氏「鶴見大学図書館蔵『堀河院艶書合』(長享二年奥書本)について」(武井和人氏『中世後期南都蒐蔵古典籍の復元的研究』平成15～17年度 科学研究費補助金[基盤研究B]研究成果報告書(研究課題番号 15320027、平18・3)所収、及び「いずれ「之連」か「元連」か—鶴見大学図書館蔵『堀河院艶書合』奥書小考—」(『国文鶴見』40 平18・3)に詳しい。

(11) 鶴見大学図書館 HP で公開中の影印画像をもとに翻刻を行った。URL:http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/Digital/horikawaimn_ennsho_awase_choukyou/horikawaimn_ennsho_awase_choukyou.html

(12) 鷹司本[266-140]は江戸写(宮内庁書陵部『和漢図書分類目録』による)。「鷹司本」の校異に関し、『歌合大成』ではいくつかの遺漏が認められる。書陵部にて原本確認のうえ、私に補った箇所については鷹と表記した。

(13) 『国書総目録』(国)、『古典籍総合目録』(古)、国文学研究資料館 HP「マイクロ資料・和古書目録データベース」(マ)などにより、伝本の一覧表を作成、国文学研究資料館にマイクロフィルムが存するものについてはこれを用いて調査を行った。項目「拠」では伝本の所在を知るに至った「典拠」を略号で示した。

| | 所蔵者 | 所蔵番号 | 拠 | 備考 | MF | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 宮内庁書陵部 | 558-159 | 国 | 嘉吉2写 | ○ | |
| 2 | 宮内庁書陵部 | 155-59 | 国 | 室町写 | ○ | |
| 3 | 宮内庁書陵部 | 155-79 | 国 | 伝尚通筆 | ○ | |
| 4 | 宮内庁書陵部有栖 | 406-22 | 国 | 幟仁親王筆 | ○ | |
| 5 | 宮内庁書陵部 | 501-109 | 国 | 合古歌之評 | | |
| 6 | 宮内庁書陵部御所 | 501-747 | 国 | 旧桂宮 | | 桂 |
| 7 | 宮内庁書陵部 | 151-63 | 国 | 十二種物合 | | |
| 8 | 宮内庁書陵部松岡 | 206-737 | 目 | | | 松 |
| 9 | 宮内庁書陵部鷹司 | 266-140 | 目 | | | 鷹 |
| 10 | 早稲田大 | 1 4/969/129 | 国 | 玉晃叢書 | | |
| 11 | 東京大本居 | 技 521/国文 1515 | 国 | | ○ | |
| 12 | 京都府立資料館 | 和 831/23 | 国 | | ○ | |
| 13 | 高岡市立図書館 | 911.1.18 | 国 | | | 高 |
| 14 | 高山郷土館香木園 | 和 歌 44 | 国 | | | 香 |
| 15 | 彰考館 | 歌 畊 巳 12 | 国 | 金森本 | ○ | |
| 16 | 彰考館 | 歌 畊 巳 13 | 国 | 菊平歌合 | ○ | |
| 17 | 天理図書館 | 081/1 37/221 | 国 | | | |
| 18 | 天理図書館春海 | 081/1 21/256 | 国 | | | |
| 19 | 上賀茂社三手今井 | 歌 米 290 | 国 | | ○ | |
| 20 | 上賀茂社三手今井 | 歌 函 382 | マ | | ○ | |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 祐徳稲荷中川 | 6/2-2/241 別7 | 国 | | | | | |
| 22 | 鶴見大(萩谷氏旧蔵) | 911.18/H | 国 | 宗覚本 | | | ○ | |
| 23 | 萩谷朴氏蔵 | | 国 | 楓洞延年本 | | | | 楓 |
| 24 | 佐賀大小城鍋島 | 0956-9 | 古 | | | ○ | | 宗 |
| 25 | 佐賀大小城鍋島 | 0956-10 | 古 | | | ○ | | |
| 26 | 島根大桑原 | 911.148-Y73 | 古 | | ○ | | | 桑 |
| 27 | 青山学院大 | 093/H7 | マ | | ○ | | | 青 |
| 28 | 戸隠大西氏蔵 | | マ | | ○ | | | |
| 29 | スウェーデン王立 | 706 1/1 197 | マ | | ○ | | | |
| 30 | 益田家 | 310 | マ | | ○ | | | |
| 31 | 鎌田共済会図書館 | 82-549 | マ | | ○ | | | |
| 32 | 歴博高松宮 | | マ | | ○ | | | |
| 33 | 佐賀県立 | 082.1-13.77 | マ | | ○ | | | |
| 34 | 徳江元正氏蔵平田 | | ① | | | | | |
| 35 | 慶應大 | 146.7.1 | ② | | | | | |

①松原宏昌氏「〔翻刻〕『堀河院艶書合』」(『室町藝文論攷』三弥井書店 平3)

②小川剛生氏「中世艶書文例集の成立—『堀河院艶書合』から『詞花懸露集』へ—」(『国文学研究資料館紀要』30号 平16・2)

＊『歌合大成』所収「山口家蔵柳原業光書写巻子本」「彰考館本」「大島家蔵本」は現在未確認。

＊『国書総目録』所載「内閣」「島原」二本は別本にて誤り、「佐賀大」は所在不明、「鶴舞」は散佚とのこと。

(14) 高岡市立高岡図書館本〔911.1.18〕は「新編和歌叢書 二」所収。巻二巻末に「宝永二年乙酉／吉祥院貫雄釈関阿」の書写奥書あり。『艶書合』は、「本云／此一冊以冷泉大納言為秀卿自筆本書写／校合完。可以證本歟。／明應六年霜月上始」(句読点は稿者)との本奥書を持つ。

(15) 島根大学桑原文庫本〔911.148-Y73〕は「陽成院歌合」「亭子院有心無心歌合」と合冊。枡形本。奥書・識語なし。島根大学 HP キャンパスミュージアム(仮称)設置検討委員会作成「島根大学所蔵標本資料類リスト 2」によれば、桑原文庫「嫁入本」とは、「松江藩5代藩主宣維に嫁いだ伏見宮邦永親王女岩姫の嫁入本と思われる」という。

(16) A本とB本との関係は未詳。Aは一首(28、Bは二首(28・41)を欠く。国文学研究資料館 HP「日本古典資料データベース」内「文献資料調査カード」によれば「(956-10は)九五六—九の写」とされるが、同親本から書写の可能性もあるか。存疑。

(17) 島津忠夫氏「小城鍋島文庫善本書目解題」(『佐賀大学文学論集』3号 昭36・9)、同氏「佐賀藩の文事—鍋島諸文庫とその展開—」(『佐賀大学人文紀要』2号 昭41・3)

(18)『和歌大辞典』(明治書院 昭61)「実顕」項。井上宗雄氏執筆。

(19)『日本歌学大系』第六巻(風間書房 昭42)

(20) 川上新一郎氏『古今集注釈書データベースの作成』平成12～13年度科学研究費補助金 研究成果報告書(〔基盤研究C2〕研究課題番号12610452、平14・3)に記載あり。

〔付記〕資料の閲覧にご高配賜りました青山学院大学、鶴見大学図書館、石澤一志氏に、記して厚く御礼申し上げます。

——あいはら・ひろみ、広島大学大学院博士課程後期在学——